



「アゲアゲ将棋実況 [プロ棋士]」より。折田翔吾四段が実況対局などを配信。棋士編入試験の結果も投稿している。



「森内俊之の森内チャンネル」より。一八世名人の資格を持つ森内俊之九段による、将棋とゲームをテーマにしたYouTube・チャンネル。



「女流棋士 山口恵梨子ちゃんねる」より。将棋講座や実況対局など、山口恵梨子女流二段が将棋の魅力を解説。



「女流棋士・香川愛生チャンネル」より。実況対局のほか、棋士を招いての対談やコスプレ動画など、多彩なコンテンツを配信。

棋士はなぜ YouTubeになるのか？

文 柳瀬徹
(ライター)

森内俊之 (将棋棋士) 香川愛生 (女流棋士)

山口恵梨子 (女流棋士) 折田翔吾 (将棋棋士)

「昨今、YouTubeバーとして活躍する将棋棋士・女流棋士が増えている。なぜ彼ら／彼女らはYouTubeという媒体を選んだのか。そこには「勝負師」だけではない、棋士の生きざまがある。」

ここ数年、「ニコニコ生放送 (ニコ生)」や「A BEMA (アベマ)」「将棋プレミアム」といったライブ動画配信サービスの普及により、将棋のタイトル戦や公式戦を一局まるごと、リアルタイムで観戦することが可能になった。しかし長い間、「棋戦の完全生中継」は将棋ファンの妄想の産物でしかなかった。二時間をゆうに超える長考や、休憩で無人となった対局場を「公共の電波」で流せるはずもない。
では、なぜインターネットでは将棋ファンの妄想を実現できたのか。もちろん、動きのない時間帯をカバーする演出や、手に汗握る攻防までをつなぐ企画に工夫を凝らしていることも要因ではあるが、それ以上に「ツイッターなどのSNSや、投稿コメントといった視聴者とのコミュニケーション機能が、将棋ファンの気質と抜群に相性が良かった」ことが最大の理由と言える。
佐藤康光九段がおやつを食べると「今日もキウイ！」と大量のコメントが画面を埋め尽くし、羽生善治九段に叩きのめされた若き気鋭が放心の表情を浮かべると「羽生がまた若手の魂を抜いた！」というツイートが拡散される。二〇一

〇年代は、アニメやゲームに匹敵するほどに「将棋とネット」の相性が良いことが発見された時代だった。

将棋とネットの相性の良さ

「もともと『ニコニコ動画』が大好きだったんです。その『ニコ生』で棋戦のネット中継が始まり、改めて動画の力を認識するようになりました」と語る香川愛生女流四段は、「YouTubeバー棋士」のさきがけともいえる存在だ。一二歳から女流アマ名人戦を連覇し、二〇〇八年に一五歳で女流二級としてプロデビュー。その後は女流王将を二期獲得するなど、女流棋界トップの一人として活躍し続けている。

目標へと最短距離で向かっていく生き様は、厳しい局面へと一直線に踏み込んでいく棋風とも重なるが、一方で香川にはもう一つの「顔」がある。現代日本オタク文化の、もとい「クールジャパン」の最先端を行く人物としての顔だ。単にゲームやアニメに詳しいというだけではなく、それらのキャラクターに扮する「コスプレイヤー」としても有名である。

二〇一九年四月にYouTube・チャンネル「女流棋士・香川愛生チャンネル」を開設した香

川は、将棋の「普及」に対する思いが強い。その熱意は、将棋を覚えた九歳の頃から始まったという。九歳という年齢はプロを目指すうえで晩学のほうだが、その三年後には女流アマ名人戦で優勝しているのだから、凄まじい成長速度だ。

香川 私が小学生の頃は、漫画『ヒカルの碁』(集英社)をきっかけに囲碁ブームだったんです。だから、友人に「将棋やるう」と声をかけても、たいてい囲碁の話にすり替わっていました。すごく悔しいし、寂しかったです。「将棋愛」をスレートに伝えてもうまくいかず、「どうすれば将棋の面白さを伝えられるのか」と、いつも悩んでいました。

香川が将棋とネットの相性の良さを実感したのは、二〇一二年に始まった「将棋電王戦」のシリーズだったという。
香川 観戦者が「これで勝ちだな」「いや、まだわからない」などと盛り上がるのは、昔の「縁台将棋」と一緒なんです。指さずに観戦だけで楽しむ「観る将」というファンも生まれました。動画チャンネルを作りたいと思ったのもその頃ですね。

将棋YouTubeにおなじみのコンテンツと なっているのは、オンライン対局サイトでの自

戦を実況する「実況対局」である。香川も「実況対局」をよく行っているが、彼女のユーチューブ・チャンネルはそれに加えて、ゲストを招いてのトークやゲーム実況、コスプレ、アニメソングの歌唱など、実に多彩な内容となっていて、視聴者を飽きさせない。

さらに、香川のチャンネルでは企業のプロモーション動画もアップされているが、その内容は普通のPR動画とひと味違う。不動産会社の社長と八枚落ちで勝負し、「香川が勝ったら新居の仲介手数料が無料、さらに視聴者も半額」としつかり「将棋」コンテンツにしているところが彼女らしい。

香川 ユーチューブを見る人は目が肥えているので、ただPRするのではなく、面白いコンテンツになるように工夫しなくてはいけないな、と考えました。これも『ヒカルの碁』に勝てなかった経験が、原動力になっているのだと思います。

「攻めの棋風」は変わらない

「ニコ生」の将棋番組に初期から参加している山口恵梨子女流二段は、二〇二〇年五月に「女流棋士山口恵梨子ちゃんねる」を開設した。山口は「猛烈な攻め将棋」で知られ、付いた異名

は「攻める大和撫子」。初心者にもわかりやすい解説と、物怖じせず先輩棋士に切り込んで彼らの素顔を引き出す手腕から、将棋ファンの人気も高い。その山口のユーチューブ・チャンネルは、意外にも将棋講座や棋譜解説、実況対局とほぼ将棋一色となっており、香川とは対照的だ。

山口 始めた当初は、香川さんが唯一の女流棋士ユーチューバーとしてすごく努力しているのを見ていたので、「香川さんの邪魔だけはしたくない」と思っていました。棋戦はともかく、普及に関しては他の人と競争したくないんですよ。テレビなどではズケズケと先輩棋士にツッコんだり、指し手を恋愛ドラマにたとえたりするぶつ飛んだキャラなんですけどね（笑）。私のチャンネルは、かなり「堅め」の内容だと思っています。

山口は「番組制作者との打ち合わせや、放送終了後の反省会が、大きな財産になっている」と語る。

山口 お世話になったディレクターさんから、ターゲットは「羽生七冠ファイバーで将棋を始めたものの、今は指していない人」だと言われて

の反応を見てもらうのも面白いんじゃないかなと考えました。自身の得意分野であり、長所でもある「読書量」を、棋士の先生たちへぶつけられたらいいなと思っています。

永世名人、

ユーチューブの野に降り立つ

そもそも、棋士の先生方が「普通」だと思っている行動や言動って、世間からするとまったく普通ではないんですね（笑）。だから、あえてズケズケと踏み込むようにしています。視聴者からはたまに「失礼すぎ」と怒られもするんですけど、棋士の皆さんは優しいので受け入れてくださっています。

棋士たちの個性を世に伝えた功労者の一人は、間違いなく山口だろう。それでも棋士たちのキャラクターの「濃さ」は、まだ十分に伝わっていないようだ。

山口 たとえば現在の将棋連盟会長である佐藤康光先生は、すごく優しくエレガントな方なのですが、エピソードを伺うと本当に面白い話ばかり出てきます（笑）。でもそうした面が、視聴者の方には全然伝わっていません。個性が豊かすぎる

人たちが溢れる世界なので、少しでも棋士のイメージを広げていきたいなと思っています。

コロナ禍もあり、続々と棋士がユーチューブ・チャンネルを立ち上げつつある現在、誰がユーチューバーになってもさほどの驚きはない。しかし、六人しかいない「永世名人」の一人である森内俊之九段が、二〇二〇年六月に「森内俊之の森内チャンネル」を立ち上げたときは、さすがに将棋ファンのあいだで衝撃が走った。

森内 「びっくりした」という声は各方面から

います。やるべきことが明確になりましたし、ターゲットを設定するという考え方も動画を作る際の参考になりました。

子どもの頃から将棋番組を観るのや、棋士や観戦記者の書いたエッセイを読むのが大好きでした。誰よりも将棋コンテンツを取り入れてきたというへんな自負もあります。

私が読んできた本の多くが絶版になっているので、「新規の将棋ファンは知らないだろうな」というエピソードを棋士本人に直接質問し、そ

たくさんいただきました（笑）。一六歳から三〇年以上も棋士として戦ってきて、自分がここまでやってきたことをお伝えすることが、何らかのお役に立てればという思いがあったのです。

二〇一九年までは日本将棋連盟の専務理事をやっていた、そちらのほうの仕事が忙しかったのですが、役職から降りて時間もできました。また別の方向で何か発信できればと思いました。理事の仕事はすごくやりがいもあり、気持ちのハリにもなりました。ただ、やっぱり慣れない仕事だったので、体重が急激に減ってしまったり、心身ともにキツかったのは事実です。

任期の二年間は自身の将棋のことは割り切って考え、理事の仕事に専念すると決めていました。だから、研究などはまったく行わず、勝ち負けよりも「とにかく最後まで指せればいい」くらいの気持ちでした。

二〇一三年には名人と竜王の二冠を保持し、常に入念な研究をしたうえで対局に臨んでいた森内が、「最後まで指せればいい」と思っていたというのは、衝撃としか言いようがない。

森内 専務理事時代は、今までにない貴重な経験ができました。決まったサイクルで職場へ行って働くというのも、初めての経験でした。お勤めされている方々の大変さが少し



やまぐち えりこ 女流棋士、ユーチューバー。1991年、鳥取県生まれ。小学1年生のときに父親から将棋を習い、2008年に16歳で女流棋士に。激しい攻め将棋の棋風から「攻める大和撫子」の異名をもつ。将棋イベントやテレビ番組などに多数出演。© 朝日新聞社



かがわ まなこ 女流棋士、ユーチューバー、コスプレイヤー。株式会社AKALI代表取締役社長。1993年、東京都生まれ。2008年に15歳で女流棋士に。奨励会を経て、2013年に第35期女流王将戦で初タイトルを獲得。翌年防衛。主な受賞歴に女流最多対局賞や女流棋士賞など。写真=幸田 森

だけ理解できましたし、仕事の傍らで将棋の腕を磨いて、プロ棋士から勝ち星を挙げられているアマチュアの皆さんの凄さも、改めて思い知りました。



もりうちとしゆき 将棋棋士、ユーチューバー。一八世名人資格保持者。1970年、神奈川県生まれ。1987年にプロ入り（四段に昇段）。タイトル戦出場25回、獲得は竜王2期、名人8期、棋王1期、王将1期の合計12期。棋戦優勝13回。2017年に史上12人目の通算900勝を達成。写真=幸田 森

森内 故・原田泰夫九段の教えに、「界・道・盟」という言葉があります。棋士は「将棋界」を第一とし、次に「将棋道」、最後に「将棋連盟」を考え、精進せよという意味です。「全体を見て、優先順位をつけて、しっかりと発展させていこう」という、強い意思を感じさせます。

三世人も、「個人的には損をしても、全体の発展を一番に考えて決断をしていく」という考えを持っていました。それまで続いてきたものを壊して根本から変えてしまおうというのは、本当に勇気のいることで、批判もあったと思います。けれど、関根先生が英断されたことが、今の名人戦へと繋がっています。

将棋連盟の黎明期を支えられた先輩方は、大変な苦勞もされてきたためか威厳があり、気軽に近づきたいというイメージがあったかもしれません。一方で現代の棋士は、大盤解説会やイベントなどですぐに会いにいける存在です。そうした「将棋ファンと棋士との距離の近さ」というのは、大事に

していきたくて、ユーチューブを始めたことで、そうした距離感をもっと詰めていければと考えています。

タイトル戦就位式でのスピーチや、解説者として話す姿を見ている限り、正直言って人前に立つことが好きそうには見えません。森内にそう伝えるとあっさり「まったく好きではないです」と即答された。

「森内チャンネル」は棋譜解説のほか、谷川浩司九段らゲストとのトーク、さらにポーカーやバックギャモン、競技かるたなど将棋以外のゲームを数多く取り上げているところに特徴がある。森内のボードゲーム好きは有名で、バックギャモンでは世界選手権四位、チェスも羽生とともに国内トップランカーだった時期がある。

森内 それぞれのゲームの「ファンが交わる場」というものが、あまりありませんでしたので、「自分のユーチューブ・チャンネルが、各ゲームファンのプラットフォームになり、将棋と一緒に盛り上がりつつあったら」と思います。

棋士人生のすべてを配信したい

将棋とユーチューブの相性の良さをプロ棋士たちに先んじて発見したのは、元奨励会員などアマチュアのプレイヤーたちだ。実況対局や棋譜解説などで数万の登録者を獲得し、「将棋ユーチューブ」のひな形を作った彼らの存在がなければこそ、今の活況がある。しかし、「ユーチューブで運命が変わった」とまで言えるのは、折田翔吾だけだろう。

一四歳で奨励会に入会した折田は、年齢制限により二〇一六年に退会している。ユーチューブで「アゲアゲ将棋実況」を始めたのはその一カ月後のことだ。以降、折田はネット上で「アゲアゲさん」と呼ばれ、将棋ユーチューバーとして活躍していく。

折田 退会後はまったく指さなくなる方もいらっしゃるのですが、私は将棋を続けようと思っていました。ゲーム実況動画が好きだったので、将棋をやったらどうなるのかなという興味が湧いて、思いつきでやってみたという感じです。

6級（例外的に7級もあり）から三段までで構成されている奨励会では、規定の成績を上げること昇級・昇段していく。プロ棋士と呼ば

れるのは四段からで、三段から四段へ昇段するには同じ三段同士で戦う「三段リーグ」を勝ち抜かなくてはならない。三段リーグは半年単位で行われ、上位二名だけが四段に昇段することができる。プロ入りへの最後の難関であり、将棋界で最も過酷な勝負が行われると言われる三段リーグで、折田は勝ち越したことが一度もなかった。

折田 アマチュアの大会で活躍してプロ編入への道を切り拓いた瀬川晶司六段や、それに続いた今泉健司五段の存在もあり、もう一度挑戦したいという気持ちはありました。ただ、そうしたアマの大会には、三段リーグで上位だった強豪も出場しています。

自分は三段リーグでも弱いほうでしたので、簡単に勝ち抜けるとは思っていませんでした。だから私にとってプロ編入は、はるか遠くの夢でした。

折田は対局サイト「将棋ウォーズ」を使って実況対局を始めたものの、初日はいきなりの連敗。だが、ここから「アゲアゲさん」のファンは日増しに増えていく。

折田 続けているうちに、「毎日同じ時間に投稿したほうが見てもらえる」ことや、「初心者から初段前後の方に向けて解説すると、内容がよ

り伝わりやすい」ことがわかってきました。コメントが付くのもうれしかったですし、再生回数が増えると広告収入になるので、ありがたかったです。「仕事にできて」という喜びがなければ、将棋を続けられなかったかもしれません。

奨励会には「退会後一年間は、アマチュアの大会に出場できない」という規定がある。退会の翌年、アマ棋戦に出場できるようになった折田は、第三四期全国アマチュア王将位大会で準優勝し、囲碁・将棋チャンネル主催のテレビ棋戦「銀河戦」への出場権を得る。

さらに第二七期銀河戦本戦トーナメントでプロ棋士に七連勝し、アマチュアとしては瀬川に次ぐ二人目の決勝トーナメント進出を果たした。これ以降「アゲアゲさん」の名は、ネットだけでなく一般の将棋ファンにも浸透していく。翌年の銀河戦でもプロから四勝を挙げた折田は、対プロ戦の成績が基準を満たしたことにより、棋士編入試験の受験資格を得た。

問題は、五万円という受験料だった。オンライン将棋教室を開講していたとはいえ、受講料とユーチューブの広告収入だけでは、厳しい金額である。そこで折田はクラウドファンディングで、支援を募ることを思いつく。